

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01022

研究課題名（和文）近代ドイツ都市における市民的救貧理念と実践形態 - 信仰と自由との緊張関係を中心に

研究課題名（英文）Ideas of Civic Poor Relief and their Practical Forms in the German Cities in the Modern Era - Focusing on Tensions between Religion and Liberalism

研究代表者

平松 英人 (Hiramatsu, Hideto)

東京大学・大学院総合文化研究科・講師

研究者番号：50755478

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀のドイツでは、近代化・世俗化・都市化が急速に進展し、伝統的な教会的貧民救済事業のなかから、あるいはそれと並行して、行政や市民による近代的社会事業が成立した。その過程で、社会的実践に携わる当事者の精神的よりどころも、愛のわざとしてのキリスト教的隣人愛から、公共の福祉に関わる市民の義務と権利としての社会的弱者支援という市民的・精神的への転換が確認できる。その一方で、信仰にもとづく愛の業としての社会的実践は、近代社会事業が一国の枠組みを越えてグローバルに展開し、ネットワーク化されていくうえで鍵となる重要な役割と意義を持ち続けていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、現代ドイツ福祉国家の前史とも言える19世紀において、慈善や社会事業の中心的担い手となった市民の動機に着目し、信仰や宗教的世界観に支えられた社会的実践がもつ歴史的意義を明らかにしたことで、福祉国家史研究のみならず、ドイツ市民層・自由主義史研究にも新たな知見をもたらしたことにある。本研究の社会的意義は、現代福祉国家が直面する危機の本質を、実践主体の動機の観点から問い直すことで、福祉国家の歴史的限界のみならず、その可能性の一端を示し、将来への展望をひらいたことにある。

研究成果の概要（英文）：With the rapid development of modernization, secularization, and urbanization in Germany during the “long 19th century” and the establishment of modern social programs by the government and citizens, either within or parallel to the traditional church poor relief, there was a shift in the spiritual grounding of those involved in social practice from a Christian love of one’s neighbor to a civic ethos of support for the socially vulnerable as public welfare. However, beyond the framework of nation-states social practice as a faith-based work of love continued to play a key role and held meaning in the global development and networking of modern social programs.

研究分野：歴史学、人文学

キーワード：ドイツ近現代史 市民社会史 社会福祉史 宗教社会史 啓蒙主義 ドイツ近世史 敬虔主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

19世紀ドイツにおける自由主義的市民層とその中核としての中間層に関しては、その社会的・政治的勢力としての脆弱性に焦点を当てる論調に対して、近年には、19世紀後半の急激な近代化と工業化により噴出した社会問題の解決にあたり、自由主義的な都市市民層が果たした積極的な役割を検証する近年の実証的研究の進展により、都市を舞台とした市民層と自由主義との関係に新たな分析の光が当てられるようになった。その一方で、19世紀のドイツ都市で展開した、自由主義思想を背景とし市民層を主体とした地方自治改革、とりわけその中心に位置づけられる公的救貧事業改革を対象とした従来の研究においては、ドイツの歴史家D.ランゲヴィーシェが1988年の著作『ドイツにおける自由主義』の中で「初期自由主義の核心部分は、主導層においても、また個人の自立に主眼を置いた理念としても、疑いなくプロテスタントの運動であった」と指摘しているにもかかわらず、自由主義と宗教性/宗派性の問題が立ち入って論じられることは少なかった。そのため、市民的自由主義と宗教性/宗派性の問題を、救貧事業における理念と実践形態の変容に着目し分析することで、近代市民社会的な世俗化原理の貫徹がより一層の進展を見せた19世紀を通じて、公共空間における個人や集団の社会的実践に宗教が与えた影響の解明が待たれている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代ヨーロッパに成立した自由で自律的な個人としての市民を、都市救貧事業という公的な社会実践へと向かわせた動機としてのキリスト教信仰の現代的意味とその射程を明らかにすることである。具体的には、近世から20世紀への転換期に至る長い19世紀を通じたドイツ諸都市における公的救貧の実践形態とその精神的支柱としての救貧理念の変容過程を、自由主義とカトリック・プロテスタント両教会との緊張関係を軸としながら、救貧事業の中心的担い手であった市民層の動向に焦点を当てて分析する。さらには、実践主体である個人に見いだせる世俗化原理と信仰とのせめぎ合いに着目することで、現代に続く社会国家が長い19世紀において生成し展開する過程で市民層と宗教が果たした歴史的役割の解明に研究を発展させていく。

3. 研究の方法

近世から近代への移行期、そしてその後の長い19世紀を通じて公的救貧事業の動向を左右した精神的背景は、キリスト教的世界観対自由主義的世界観という単純な二項対立の構図で十分理解できるものではない。むしろ同一人物や同一集団においても、異なる世界観が相克しつつ共存していたことが普通であった。さらに公的救貧事業の動向は、都市共同体における異なる「公共の福利」観の存在と、その実現を目指す当事者間の駆け引きにも左右されながら複雑に展開していった。そこで本研究では、ドイツ近世史、キリスト教史の分野で、17・18世紀のドイツ都市を研究対象とし、救貧と教育という公的実践の場における宗教と世俗化の問題に取り組んできた研究分担者と協力し、公的救貧事業という社会的実践の場で表出される宗教的動機と世俗化原理との緊張関係を、具体的な事例の比較検討を通じて、前近代から近代への連続性/非連続性の諸相で明らかにする。比較分析の対象とするドイツ諸都市(カトリック都市とプロテスタント都市)は、両者のこれまでの研究に基づき、歴史的・宗派的背景、規模、先行研究や史料状況などを考慮して決定する。カトリック都市の分析は研究代表者が、プロテスタント都市の分析は研究分担者が、当面分担して担当し、歴史的連続性・非連続性の視点から事例研究を進めつつ、比較分析を通じて宗派性による差異を明らかにした上で、総合的な結論を導き出す。

4. 研究成果

(1)から(6)で各年度の研究成果をまとめ、最後に(7)で本研究計画の遂行によって得られた中心的な成果を述べる。

(1)2018年度は本研究計画の基盤となる分析手法確立に向け方法論の検討から研究に着手した。ドイツ人歴史家ラインハルト・コゼレックの概念史は、本研究の目的である市民の社会的実践における宗教的動機を政治や社会の歴史的脈で解明する上でも有効であると考えられることから、分担研究者のほかに歴史学、言語学、哲学の分野から第一線の研究者の参加を得て概念史研究会が組織された。本年度中に二度開催された研究会を通じて、概念史が本研究の分析手法としてだけでなく、社会言語学や哲学分野においても、社会と人間行為との関係を考察する際に意義のある方法論であること、さらには本研究の成果が近隣諸分野の研究に及ぼす波及効果の意義を確認することができたのは、今年度の主要な成果の一つに挙げられる。アーヘンで実施した現地調査では、カトリック市民らが設立した民間福祉諸団体がケルンと比べより一層重要な地位と役割を担っていたこと、市の公的救貧事業再編に際しては、宗派による対立や意見の相違が表立ってみられなかったことが確認できた。このことは今後、宗派の力関係と公的救貧事業の形態や地域差を比較検討していくうえで重要な知見といえる。分担研究者は「近代ヨーロッパとカト

リシズム」研究会において「近世ドイツ敬虔派と社会事業（ディアコニー）」という題目で、18世紀全般にわたる敬虔派とその社会事業について報告をおこなった。宗派研究は宗派ごとに分かれて行われることが多い中で、カトリック研究者と宗派や国境を超えた議論を共有し、本研究計画の意義と今後の方向性を確認できたことに加え、第一線のカトリシズム研究者に本研究の重要性が認められたことは大きな成果であった。またバーゼル大学やチューリッヒ大学神学部所属の研究者らとの研究交流を経て、相互的な協力関係を築くことができたのも、今後の研究の国際化や成果の国際的発信の点から意義のあることであった。

(2) 2019年度、研究代表者は前年度におこなった概念史による分析手法の方法論的検討によって得られた知見を、本研究プロジェクトの基本概念である「福祉 Wohlfahrt」「福祉国家 Wohlfahrtsstaat」「社会国家 Sozialstaat」の分析に適用し、検討することから、今年度の研究に着手した。ドイツ語圏においては、Wohlfahrt や Wohlfahrtsstaat という概念には、19世紀以来の国家中心的な概念理解の歴史的伝統を踏まえて、今なお否定的な含意が見られる。しかし、Wohlfahrtspflege や Wohltätigkeit という関連概念には、個人主義的自由主義的な流れを汲む側面も存在する。このような事実は、宗教的動機が市民の自発的な社会的参加に与えた影響を解明する上でも、重要な知見であることが確認できた。研究分担者は、主に敬虔派が集った宗教団体であるドイツ・キリスト教協会について、前年度に実施したバーゼル大学文書館所蔵の未刊行史料の調査結果をもとに分析をすすめた。同協会については、協会の議事録、会報、書簡などを抜粋して編集し刊行した史料集があるが、未刊行の史料の状況と、それがカバーする範囲について現地で感触を得たうえで、さらなる史料分析をおこない、史料の読み方やそれにもとづく自らの見立て、組織や個人の性格についての見解の確かさを確認し、考察を深めることができた。前年度末には、この協会に関連する他の敬虔派団体や個人について希少な複製もできたため、それらにももつぎながら、18世紀後半の市民社会における敬虔派の自他理解についても検討を加えた。その結果、神聖ローマ帝国内での、啓蒙期の宗派にかんする二つの相反する政策事例を背景に、ドイツ・キリスト教協会が一貫して取った宗派協調的姿勢を明らかにするとともに、活動軸の設定に関する協会内部での差異も明確化することができた。

(3) 2020年度、研究代表者は前年度に得られた知見を19世紀市民社会研究における宗教社会史の研究蓄積の中に位置づけなおすことで、批判的に再検討した。その結果、宗教的動機が市民の自発的な社会的参加に与えた影響を解明するうえで、長い19世紀のドイツにおいては、カトリック・プロテスタント両宗派間の対立関係に着目するだけでなく、カトリック内部におけるリベラル・保守、プロテスタント内部におけるリベラル・保守の緊張・相互関係を具体的事例に即して、より詳細に検討する重要性が明らかとなった。研究分担者は、前年度に行った学会報告をもとに論考を完成し、刊行することができた。その学会報告ではいわゆる宗派寛容政策をプロテスタント圏とカトリック圏を比較しながら取り上げたが、寛容とは現在我々の理解するような民主的、自由主義的な意味とはおおよそ結びつかないものであることが明確になった。また、その関連で、検閲制度の重要性に気づくことになり、今後の研究の方向性が定まった。今年度現地調査はできなかったが、現地の文書館とコンタクトを取り、検閲と宗派政策に関する歴史資料を部分的にデジタル化して入手することができた。それをもとに、今後の可能性を探っていく。

(4) 2021年度は、前年度までに実施した研究に、新たに海外から取り寄せた資料の分析を加えて、総合的な研究成果の取りまとめに着手した。その一環として、キリスト教史学会第72回大会において、シンポジウム「近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩」を企画し、研究代表者がパネリストとして、研究分担者がコメンテーターとして研究成果の一部を報告した。シンポジウムではイギリス、アメリカ、日本、中国での市民の社会的参加における宗教的動機と、社会や宗派間・宗派内における緊張・相互関係についての報告もあり、活発な議論がおこなわれた。今後このような国際比較をさらに進めていくことで、ナショナルヒストリーの枠組みでは得られない新たな知見の獲得が期待できるシンポジウムとなった。さらに本シンポジウムでの報告をまとめた論集の出版が決定したことも、今年度の大きな成果であった。そのほかの研究実績としては、研究代表者が、青山学院大学総合研究所プロジェクト「住宅政策・構想が地域社会に与える影響に関する史的研究」研究会において「19世紀前半ドイツ都市における住宅問題へのまなざし - アーヘンの事例」と題する研究報告をおこなった。この報告では、近代都市における住宅問題について、19世紀後半、特に20世紀前半の時代を対象とした研究が多い中で、アーヘンを事例として、18世紀後半から19世紀前半における貧民の住宅問題の実態と、それに対する教会や市民社会のまなざしを解明するための準備作業をおこなった。

(5) 2022年度は、前年9月に開催されたキリスト教史学会大会シンポジウム「近代都市形成期のキリスト教と社会事業」で研究代表者と分担研究者がそれぞれおこなった報告を、シンポジウムでの議論とその後の研究とを踏まえて論文としてまとめる作業を進めた。それらの論文は2024年9月にキリスト教史学会監修：馬淵彰・平松英人編著『近代都市形成期のキリスト教社

会事業：黎明期の苦悩』として教文館より刊行予定である。報告で明らかにしたことを要約すると、以下の通りである。1．キリスト教社会事業では、貧困は文字通り神学的（聖書的）な意味における「罪」の結果であり、それがカリタス、隣人愛にもとづく社会事業の重要な根拠の一つとなっていた。2．同時にそれは、カリタス、隣人愛の対象となるに値する貧者と値しない貧者を区別する根拠となる危険性をはらむものでもあった。3．キリスト教的規範による社会のみが社会的弊害を克服でき、キリスト者の責任からなされる社会的行為のみが真実の人間性であるとする世界観にもとづくキリスト教社会事業は、近代的福祉国家原理とは必然的に緊張関係にあった。4．一方で、19世紀の都市においては、市民たちは自らが依拠する世界観にもとづく「公共の福利」「公共善」の実現をめざしながら、時には競合し、時には協働しながら、現代の福祉国家へと続く下地を準備していった。今年度はまた、コロナ禍以降初めてとなる史料調査をドイツ・ケルン市にあるケルン市歴史文書館で部分的に実施することができた。ボン大学のマンフレート・グローテン教授、およびハレ大学のマンフレート・ヘットリング教授と面談し、本研究計画で分析対象となっている愛国協会などの市民結社と敬虔派に加えて、メノー派等他のキリスト教各宗派とのネットワークとそれぞれの特徴を丁寧分析する必要性について助言を受け、今後、本研究課題を発展させていくうえで有益な示唆を得ることができた。

(6) 2023年度は、前年度までの研究成果を踏まえ、総合的な研究成果のとりまとめを進めた。その具体的な作業としては、研究代表者がパネリストとして、研究分担者がコメンテーターとして企画した2021年のキリスト教史学会第72回大会シンポジウム「近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩」での各報告を、研究代表者が編著者の一人となって論集にまとめる作業をおこなった。

(7)「近代ヨーロッパに成立した自由で自律的な個人としての市民を、都市救貧事業という公的な社会実践へと向かわせた動機としてのキリスト教信仰の現代的意味とその射程を明らかにすること」が目標として掲げられた本研究計画において、研究代表者は主として、カトリックが主流派を占めるケルンとアーヘンの二都市を対象に、19世紀に近代化・都市化が急速に進展するなかで、伝統的教会的貧民救済から行政や市民による都市政策、社会事業としての公的救貧事業への転換過程における信仰の位置づけとその意義、役割とを考察した。その結果、両都市においては救貧における精神的よりどころが、キリスト教的隣人愛から近代市民社会における公共の福祉への貢献としての社会的弱者支援という市民的エートスへの転換が確認できる一方で、社会的実践に関わった当事者たちのキリスト的愛へのこだわりも、さらには信仰実践であり、かつ宣教の機会でもあったキリスト教救貧の意義、役割も、ただ単純に後退、あるいは衰退していったとは言えないことが明らかとなった。この成果に、18世紀から19世紀にかけてプロテスタントの国境を越えた活動を分析した研究分担者による研究成果をあわせて鑑みれば、長い19世紀において社会の近代化と世俗化が展開していくなかにあっても、キリスト教信仰にもとづく社会的実践の役割と意義は、近代社会事業が一国の枠組みを越えてグローバルに展開し、ネットワーク化されていくうえでの鍵となる重要な契機であったと評価できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuki Ikari/Hideto Hiramatsu	4. 巻 -
2. 論文標題 Why European History - Why not European History?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 WHY EUROPE, WHICH EUROPE? A Debate on Contemporary European History as a Field of Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平松英人	4. 巻 76
2. 論文標題 特集1 近代都市形成期のキリスト教と社会事業—黎明期の苦悩（第72回大会シンポジウム）報告2 ドイツ「社会都市」の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 猪刈由紀	4. 巻 76
2. 論文標題 特集1 近代都市形成期のキリスト教と社会事業—黎明期の苦悩（第72回大会シンポジウム）コメント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平松 英人	4. 巻 20
2. 論文標題 福祉国家と市民的社会参加：19世紀市民社会論の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヨーロッパ研究=European Studies	6. 最初と最後の頁 75～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000059	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 猪刈由紀	4. 巻 74
2. 論文標題 パーゼルから見る二つの寛容 - ドイツ・キリスト教協会と二つの宗教令 オーストリア (1781) とプロイセン (1788)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 230-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Hideto Hiramatsu
2. 発表標題 Soziale Frage und Armut - Grenzen des zivilen Engagements unter der autoritaeren Gesellschaftsordnung in der Meiji- und Taisho-Zeit Japans
3. 学会等名 6. Ostasiatische DAAD-Zentrenkonferenz (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 猪刈由紀
2. 発表標題 カトリック信徒の聖書集会 - 18世紀ルツェルンの場合
3. 学会等名 第73回日本西洋史学会大会 小シンポジウム3「宗教改革の概念と実相 - 欧米世界と日本」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 19世紀前半ドイツ都市における住宅問題へのまなざし - アーヘンの事例
3. 学会等名 青山学院大学総合研究所プロジェクト「住宅政策・構想が地域社会に与える影響に関する史的研究」研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 シンポジウム「近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩」ドイツ（「社会都市」の観点から）
3. 学会等名 キリスト教史学会第72回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 猪刈由紀
2. 発表標題 シンポジウム「近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩」コメント
3. 学会等名 キリスト教史学会第72回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 市民社会研究からみた社会福祉史研究への一視角 - 大阪府方面委員制度との比較も交えて -
3. 学会等名 第76回社会福祉形成史研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideto Hiramatsu
2. 発表標題 Die Wahrnehmung der fremden Erfahrungen und deren Translationsprozesse in der Praxis der oeffentlichen Wohlfahrtspflege in Japan
3. 学会等名 北京大学第4回ドイツ学術交流会東アジアドイツ・ヨーロッパ研究センター会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideto Hiramatsu
2. 発表標題 The Flow of Ideas and Institutions Across the Border. Local Welfare System in Germany and Its Reception in Japan in the Early 20th Century
3. 学会等名 The International Scholars Lecture Series of the Department of Sociology at Chung-Ang University, Seoul, South Korea (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 福祉国家と市民的社会参加 - 19世紀市民社会論の視点から
3. 学会等名 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター主催国際シンポジウム「ベルリンの壁崩壊30年 - 変わりゆくドイツの現在 (招待講演)」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪刈由紀
2. 発表標題 ドイツ・キリスト教協会(1780-1790) オリエンティールングと自己規定
3. 学会等名 アルプス史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪刈由紀
2. 発表標題 ドイツ・キリスト教協会と二つの寛容 オーストリアの寛容令 (1781年) とプロイセンの宗教令 (1788年) を例に
3. 学会等名 第70回キリスト教史学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 方法論としての概念史理解のために - 丸山眞男・石田雄・コゼレック -
3. 学会等名 概念史研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松英人
2. 発表標題 社会史研究におけるコゼレック概念史の可能性
3. 学会等名 概念史研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猪刈由紀
2. 発表標題 近世ドイツ敬虔派と社会事業（ディアコニー）
3. 学会等名 近代ヨーロッパとカトリシズム研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 平松英人・馬淵彰（編著者）：木原活信・猪刈由紀（共著者）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 -
3. 書名 近代都市形成期のキリスト教と社会事業：黎明期の苦悩（平松英人「第2章 近代黎明期のドイツ都市におけるキリスト教社会事業 カトリック都市ケルンとアーヘンの事例から」猪刈由紀「第4章 海を渡るキリスト教社会事業」）	

1. 著者名 水野博子・川喜田敦子（編著者）：山根徹也、平松英人、佐藤公紀、今井宏昌、磯部裕幸、穠山洋子、伊東直美、伊豆田俊輔、柳原伸洋、パトリック・ヴァーグナー（共著者）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ドイツ国民の境界（平松英人「第2章 ふさわしい貧者／ふさわしくない貧者の概念史 - 一九世紀前半の「社会問題」にみられるキリスト教的規範と市民的規範」）	

1. 著者名 石田勇治・川喜田敦子・平松英人・辻英史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 ドイツ市民社会の史的展開 現代ドイツへの視座 歴史学的アプローチ3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	猪刈 由紀 (Ikari Yuki) (10773583)	清泉女子大学・文学部・非常勤講師 (32632)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------